



# 胡粉

ごふん



## 胡粉の原料



風化された牡蠣

## 概要

胡粉（ごふん）は、牡蠣・蛤・ほたて等の貝殻からつくられた日本画の白色絵具です。主成分は炭酸カルシウムで、微粒子でなめらかな艶のないマットな質感が特徴です。胡粉そのものに接着性はなく、膠液（にかわえき）を加えることにより支持体に定着します。

胡粉の用途は幅広く、日本画絵具の中でも重要な絵具です。白色としてだけではなく、色数の少なかった日本画絵具の混色に多用されてきました。墨との混色を「具墨（ぐずみ）」、朱との混色を「朱の具」と呼ばれるように、「具（ぐ）」は胡粉を意味します。その他、絵具の発色をよくするためや盛り上げるための下地、仕上げ等、使用方法は様々です。また、染料を染めつけた水干絵具の原料でもあります。

「胡」は中国では西域を指し、その胡の国から伝承された粉のことを意味しています。鎌倉時代までは鉛白が用いられていましたが、高温多湿の気候や朱の影響で黒変色することから、室町時代以降は現在のように貝殻が用いられています。

胡粉の製造は、原料の貝殻を長年風化させて、表面の不純物を取り除きます。それを粉砕器で砕き、さらに水と練り合わせて石臼で湿式粉砕します。粒子の重さにより水中での沈殿速度の時間差があることを利用した水簸（すいひ）により沈殿させます。杉板に薄く流すようにのせて天日で乾燥させた後、叩き落として杉板から外します。

胡粉は、貝の種類や大きさ、部位または精製段階により、数種類に選別します。上質のものは、やわらかな色合いで上塗りや仕上げとして、粗製なものは被覆力ある白色で、不揃いの粒子は隙間を埋めるので下地や盛り上げに適しています。制作に応じて使い分けます。

胡粉は、ひび割れや剥落の恐れがあるため、それを防ぐために膠とよく馴染むように時間をかけて丁寧に溶きます。用途が多い上に溶く手間がかかるので、多めに溶いておき、必要量ずつ絵皿に移して使用します。胡粉は団子状またはクリーム状の段階で、冷蔵庫に4～5日なら保存できます。冷蔵庫から出して使用する際は、絵皿に取り、電熱器等で温めて溶かします。

胡粉は、日本画の材料を取り扱う画材店で購入できます。

## 胡粉を溶く (例1)



手順1. 乳鉢に適量の胡粉を入れて、ザラつきがなくなるまで、空  
ずりします。



手順2. 少しずつ膠液を加えて混ぜ合わせます。膠液の量に注意し  
ながら練り上げると、胡粉が乳棒に絡みつようになります。



手順3. 胡粉をひとつの塊にまとめ、手に取って団子状にします。



手順4. 団子状の胡粉を乳鉢に何度も強めに叩きつけることで、膠  
分が均等に行き渡るようにします。これを「百叩き(ひやくたたき)」  
といいます。胡粉は耳たぶ程の柔らかさが良いとされています。



手順5. ときおり、団子を両手に挟み、ひも状にのばして胡粉と膠  
液をよく馴染ませます。再び団子状に戻します。



手順6. 胡粉が浸る程度に50～60℃位の湯を注ぎ、数分置き、  
灰汁を抜きます。



手順7. 再び、乳鉢に団子状の胡粉を入れて、適量の水を加え乳棒で溶きおろします。粘りが出てクリーム状になります。



手順2. 膠液は少しずつ胡粉と混ぜ合わせます。練った胡粉を団子状にまとめます。



手順8. 使用量を絵皿に取り、膠液や水を加えて適当な濃度に溶きおろします。



手順3. 団子状の胡粉を絵皿に強めに叩きつけること（百叩き）で、膠分が均等に行き渡るようにします。

## 胡粉を溶く（例2）



手順1. 胡粉の量が少ない場合は、絵皿で溶くこともできます。乳鉢と乳棒で空ずりした胡粉を絵皿に移します。胡粉を盛った山の中央をくぼませて、膠液を加えます。



手順4. 胡粉を絵皿に押し付けて固定し、水を少量ずつ加えて適当な濃度に溶きおろします。